

# 神田附木店

長谷川時雨

青空文庫



八月の暑い午後、九歳ここのつのあんぼんたんは古帳ふるちやうめんや面屋めんやのおきんちゃんに連れられて、附木店つけぎだなのおきんちゃんの叔母おばさんの家へいった。

附木店は浅草見附内みつけの郡代——日本橋区馬喰町ばくろちやうの裏と神田の柳原河原のこつちうらにあたっている。以前もとは、日本橋区の松島町とおなじ層の住民地で、多く願人がんじん坊主ぼうずがいたのだそう。附木を造つて売つたから附木店の名がある。だが、あたしが連れてかれた時はそんな場処ではなかった。表通りは何処どこか閑散として、古鉄屋ふるがねやや、かもじ屋や、鍛か冶屋位じやが目に立つたが、横町は小奇麗こぎれいだった。

おきんちゃんは、一間の格子と一間の出窓をもつた家の前で止まった。窓には簾すだれがあつて、前に細つこい植木が二、三本植わっていた。万年青おもとの芽分けが幾鉢も窓にならべてあつて、鉢には鰻うなぎの串をさし、赤い絹糸で万年青が行儀わるく育たないように輪めぐを廻らしてあつた。格子をあけると中の間の葭屏風よしびやうぶのかげから、

「きんぼうかい？」

と声をかけた女ひとがある。昼寝をしていたのだらう屏風の横からこつちをちよいとみて、きんぼうが一人でないので起上つた。

あたしはその人を立派な女だなあと思つて見とれていた。綺麗な女は幾人も見たが、なんだか大々だいだいしてみえたのだ。色の浅黒い大きな顔で、鼻がすつと高くつてしおのある眼だった。剃そつた眉毛まゆげがまつ青だった。大きな赤い口で、齒なすびいろは茄子色につやつやしていた。洗い髪がふつとふくれて、浴衣に博多の細帯をくいちがうように斜はすにまいていた。

その女が、団扇うちわをもつ手で、葭屏風をかたよらせながら言った。

「そのお子さんかい、きんぼう。」

十歳とおで、小柄で、ませている、清元の巧じょうず者な、町の小娘お金坊は、蝶々まげ鬘まげにさした花簪かんざしで頭を搔かきながら、ええとといった。あんぼんたんのことは話しずみの友達だったのだから。

「やつちゃん、てつたのねえ。」

その女は綺麗きれいな、ちりめんの小枕こまくらに絹糸の房の垂れている、きじ塗りの船底ふなぞこまくら枕まくらをわきによせながら、花筵はなごさの上へ座つたままでいった。そばには大きな猫がいた。

あたしは猫が大きらいだ。おまけに化けそうな大猫で、ふとい尻しつぽの長いのだから、なおいやだった。それにもかかわらず、初対面のこの女の魅力ひとと、ここの、せまい家うちの、八幡やわたの敷ふしらすのような面白さに、おきんちゃんについて毎日通うようになってしまった。

おしよさん、とおきんちゃんは叔母さんのことを呼ぶ。その時分、好事家の間から、漸く一般的に流行しかけて来た、東流二絃琴のお師匠さんだったからだ。

ここで、すこしばかり知ったかぶりをいうと——これは九歳のあんぼんたんではなく、その後十年もの間にぼんやりと知ったものだが——東流二絃琴は明治十七年ごろ世に流行しはじめた。家元の藤舎芦船といった加藤某は、世をすねて、風流文雅に反れた士である。高弟藤舎芦雪、またなみなみの材ではなかった。この後継者が早折しなかつたら、東流二絃琴はもつとひろまったであろうと惜まれていた。

芦船、芦雪は、歌曲ともに創作する力を持ち、九十五曲を作りひろめた。この二絃琴の特長は粹上品なのである。荻江節も一中も河東も、詩吟も、琴うたも、投節も、あらゆるものの、よき節を巧みにとり入れて、しかも楽器相当に短章につくつたところに妙味があった。それゆえ初心者には解せぬ、いうにいえぬうまみを出すことに苦心があったわけである。で、あれもこれもと知りつくした、一流の手練の人たちがならいはじめてひろめた。重に中年者以上の、生活に余裕のある、ものの音じめをあげつろう輩であった。よい衆の旦那、御内儀、権妻——いき好みの、琴はどうも野暮くさいといった人が、これはいいと集まった。明治に生れた楽器である。八雲琴が素で、竹琴、一絃琴などが

参酌されたものと思われる。九代目市川團十郎が『忠臣蔵』の大石内蔵之助で、山科の別れに「冬の恵」を奏で、また四国旅行の旅土産に、「三津の眺め」の唱歌をつくったので、一層評判になった。宣伝にも抜目はなかつたのであろうが、通人である芦船は、求めずしてその道の人たちとも社交があつたので、むしろ團十郎の方が、新しい思いつきとして、または自分の好きな道を舞台にとり入れたのかもしれない。片岡仁左衛門も大石をすると二絃琴を弾いたが、調子がとのわないのが耳についた團十郎もしきりに調子を直し直し、芝居が楽になつたそうである。

二絃琴の調子は、糸がたつた二筋だから単純でいて、そのくせ複雑だ。一体二絃琴の響は一問へだてた方が丸味をおびてよいものだが、しかし、それは弾手の耳と、趣味の深さ浅さによるは論をまたない。もともと小楽器で、小曲的なものに適しているのを、大きな合奏曲の真似までしようとしたところにはほころびがある。最初のうちの作曲や歌詞は、それをよく知つてつくられているが、段々大物にしようとしたところに無理がある。

それは、芦船という人があまり器用すぎたのだろう。道楽で、猿若町の芝居の囃子部屋にもいたりしたから、あの楽器へ、長唄同様な囃子をつけた。黒人がきくと、あらゆる囃子の手がもちいられてあつて舌をまくというが、そのよき伴奏者のために、細い二

本の絃いとは悲鳴をあげなければならなくなつて、二絃琴の真のよさを失なつた嘆きがある。もとより、江戸情緒風物をたすける、影の、軽い伴奏はあつてよい、私のいうのは鳴ものにまくしたてられて、ヒステリカルにキンキンならされるのを惜むまでだ――

きんぼうに連れられて、あんぽんたんが二絃琴のおしよさんの家に入った時分には、もう家元芦船も芦雪なぐも歿なぐなつていた。直門じきもんに、芦質ろしつ、芦洲ろしゅう、芦総ろそう、芦寿賀ろすがらが残つていた。きんぼうのおばさんがその藤舎とうしゃ芦寿賀ろすがなのである。

芦質おくさんさんという女が一番名望家らしかつた。青白い、神経質らしい、その仲間でのインテリ夫おくさん人だつた。薄い髪かみの毛を上品に、下の方へ丸めた束髪むくみで、白っぽい風通ふうつうか小紋こもんちりめんを着て、黒い帯をしめ、金歯が光つていた。斯波しばさんの御新造ごしんぞうといつて、浅草蔵あさくさくらう前の方にいたから、もしかすると民政党の斯波氏のおうちの方だつたかもしれない。この女ひとが家元の格をもつていたようだつた。

日本橋伊勢町の方に芦洲さんは住んでいた。肥ふとつた黒い、立派な押出しのおかみさんだつた。大きい、勢いのいい店の内儀だつたのだろうと思う。いま、東流二絃琴の正統な弾手として奮闘しているのは、この人のお弟子さんたちになちがいない。ごく若い娘さんたちで、名取になつていた人のあつたことを思いだす。この派の弾き手なら、直門の正しい手

法といえるだろう。ただ、私の子供の耳にも、やや余情のない、勢いのいい、ハッキリした芸風と思えた。

二絃琴は歌が——節がむずかしい。私はそんなふうにおぼえた。芦寿賀さんは節がやかましかつた。曲をおぼえればそれでいいとしなかつた。尤も、それは、きん坊とあんぽんただけで、あとの人は普通に、器楽の方を主にして教えはしたが、二人の子供は歌の方が三日、琴の方は一日で自分から弾けてしまった。

あんぽんたんは、二絃琴がどんなものか、おぼろげながら知っていた。私の家にも芦船師が来たのだそうだが、そんな事は知っていない。ただ二絃琴という名は知らないが、おしよさんの家で見るとおなじ楽器が私の家にもあったのだ。父が時たまとりだして、安座をかいて、奏管（琴爪）で琴につけた譜面の星を、ウロウロ探しあてて弾いていた。大かた九世団十郎時代の、お弟子の一員でもあったのであろう。父はその琴を撫でいつた。

「これは芦船の形見だよ。」

後にわかつたのは、葉研堀にいた妾は、日本橋区堀留の、杉の森に住んでいた堅田という鳴物師の妹だった。今でも二絃琴の鳴物は、鼓の望月朴清の娘初子が総帥で



ある。

おしよさんの家は格子戸の中が半間はんげんのたたきに二畳、となりに窓の部屋、中の間の八畳にずっと戸棚があつて、一方の壁に箆笥たんすがならび、その上に一ぱい細かいものが飾られてある。そのさきが長四畳ながよじようと台所のれん口がある。長四畳の縁は台所の後までついていて鉢植ものの棚と、箱庭と金魚鉢の小庭がある。庭口から女中さんが廁むかひじようへくるときは、外で下駄をぬいでくるほど小庭の中はきれいで、浜でとれる小貝や小砂利が磨いてしいてある。外は紺屋こうやの張り場だつた。塀外に茄子なすの花が紫に咲いて、赤紫蘇しそのほが長く出ていた。

外おもての窓の部屋に、硝子戸ガラスの戸棚と小引出しがずっとならんでいたが、おしよさんの連つれあ合いの商しょう業ぎょうは眼鏡のわくとレンズを問屋へ入れるだけで、商品かざが量かさばらない商業だつた。時々したじよく下職したじよくが注文をうけに来ていた。連合は開港場の横浜で手びろくやつていた、派手な商館相手の商人だつたが、おしよさんのために逼塞ひつそくしたということだつた。らつこのトルコ型の帽子に、ラクダの頸巻くびきをして、外国人のような高い鼻をもった大きな人だつたが、家にいる時は冬は糸織のねんねを着、夏は八端はつたんの平ぐけを締めて、あんま

り話はしないが細かく氣のつく人だった。

おきんちゃんのうちも日蓮宗狂だが、此家の二人もそうだった。長四畳には帝釈様の髭題目の軸がかかっている、お会式の万燈の花傘の、長い竹についた紙の花が丸く輪にして上の方にかかっている。軸の前の小机には、お燈明やら蠟燭台やら、お花立やらお供物の具や、日朝上人のお厨子やら、種々な仏器が飾つてある。

おしよさんは、その部屋の、真中の柱に、長い柱鏡のかかっている前に、緋の毛せんを敷いて二面の二絃琴にむかつて座つている。すべての小道具は、燦然とみな磨かれて艶々している。座ぶとんの傍に紫檀の煙草盆があつて、炬扇でよせられた富士山形の灰の上に香がくゆつている。二面の二絃琴の間には、漢方医がもたせてあるいた薬箱が、丁度両横から押出すようになつていて具合がよいので、薄い横とじの唄本をおくためにおかれてあつた。六ツばかりある引出しには、絃や、小鋏や、懐中持ちの薬入れに入れた、絃に塗る練油などが入れてあつた。おじさんは、おしよさんのために、子供たちの琴の譜をさし示す銀の細い、消息子のような棒をつくらせてくれたりした。

おしよさんが髻をかきつけている巧さ——合せ鏡で、毛筋棒のさきで丸髻の根元を撫でいる時鬢のように格好のいい頭を、あんぼんたんは凝と見つめていた。七日目でも結いた

てよりきれいで格好もよかった。私は夏の日、日盛りを稽古にゆくが、おしよさんの邪魔はしなかった。おしよさんが寝ていても、お客様があつても、髪結いさんが来ていても、お湯にいつてきてからでもお化粧がすんで、さあはじめましょうよといわれるまで、幾時間でも、待てば待つほどおとなしくよろこんでいた。なぜなら、おしよさんのうちには、くさ双紙ぞうしの合巻ごうかんものが、本箱に幾つあつたかしのれない。それがみんな、ちよいと何処どこにもあるようなものではなかった。品も新らしいように奇麗で、みんな初版摺ずりだったから、表紙絵の色刷すりも美事だった。

「ヤツちゃんは大事に丁寧に見るから。」

おしよさんは誰も他に人がいないと、秘蔵な『田舎源氏』まで出して見せてくれた。

「ヤツちゃんは絵を見るばかりじゃない、ちゃんと読むんだからな。」

おじさんも同感であるといった。だから向うでも長い日のうちには、私は半日いようと邪魔にならない存在になつて、ちよいとした留守番もする。そこらにのそのそしていても、猫とおんなじ位の身うちあしらいだった。ある時おじさんがうんうんいつて押入れの葛籠つづらを引っぱりだして暑いのに何をはじめたんですとおしよさんが小言をいった。

古い錦絵にしきえ——芝居の絵を沢山に張つた折本おりほんを、幾冊かだしてくれた。私の家にもそ

れらはいくらかあった。だが、このように系統だつて集めたものではない。夫婦は熱心に、これはなんという役者で誰の弟子、当り芸はなにで、こんな見得みえをした時がよかつたとか、この時の着付けはこうだとか、誰の芸風はこうで彼はこうと、自分たちの興味も手つだつてよく話してくれた。

小伝馬町の古帳面屋の店蔵みせぐちの住居の二階で時折見かける、盲目で坊主頭ぼうしんのおばあさんが、おしよさんのうちにも時々来てとまつていた。

紺ひしえほい麻の単物ひとえを着て、唐繻子とうじゆすの細い帯をキチンとしまえている盲目のお婆さんは、坊主頭でもいきな顔立ちだつた。彼女は縁側いよすにちかい伊予簾いよすのかげに茵しとねを敷いていて——縁側には初夏ならば、すいすいと伸びた菖蒲しょうぶが、たつぷり筒形の花いけに入れてあつたり、おもと万年青の鉢があつたり、石せきしやう菖の鉢がおいてあつたりした。おばあさんは長刀ながなたほおずきを鳴らすのが好きで、

「おツさん、あつしにも一本おくれよ。おやおや、こりやばかにいいんだね。」  
なんて、楽しんで、さきを切つてもらつて器用に鳴らした。丈たけが二寸からある、長刀ながなたほおずきは、その時分でも一本一錢五厘から二錢位した。

その坊主頭の盲目のおばあさんが、キンボウとヤイチャンを前にならべて、錆さびた洗いの

どで唄の素稽古すげいこをする。そばで聞いていて二絃琴の唄はすっかり暗唱あんちやうしているのだ。おツさんの——おしよさんというのがそうきこえる——あすこんとこは巧うまいね、好いい節ふしだなんという。この坊さん昔はよつほどそれ者ものだったのに違ちがいがない。横網よこあみ河岸がしの備前家びぜんさま（今の安田公園の処めかけ）のお妾めかけお花さんが、毎日水門すいもんから屋根船を出して、今戸河岸いまどがしの市川権十郎やの家へいったのでお家騒動さわどうが起り、大崎の下邸しもやしきへ移転うつりかするという噂うわさから、この坊さんんもそんなような前身ぜんしんで、大崎の下邸しもやしきには由縁ゆかりのお墓むらもあるといった。

「御前様ごぜんさまはお美しい方かただったね、殿様てんさまが知事ちじ様さまにおなりになった時、御一所ごいしよにお立たちになるので両国の店の前で、ちよいと御挨拶ごあいさつもうしあげた時見上げた事ことがあるけれど、大きなお眼まなこで、真まつ黒くろなお髪かみに、そりやあ鼈べつこう甲こうの筭がしがテラテラして、白襟あらいに、藍色あゐの御紋ごもん附つきだったけれど、目が覚めるようだった。」

とおしよさんもいった。両国の店みせつてなあにと聞くと、

「困こまったねえ。」

と母娘おやこして笑わらった。おしよさんの家うちの軒燈けんとうには山崎やまざきとしてあるが、両国の並なび茶屋ちやの名なも「山崎」だったと坊さんのおばあさんがいった。

あんぼんたんの好奇心こうきしんは拡大ひらげられた。並なび茶屋ちやを出でしたおしよさんの若い時分ときはどんな

だろう、盲目のおばあさんの、大名のお部屋さま時代はどんなだろう。そこに、くさ草紙ぞうしの世界が現われ綿絵の姿が髻髻ぼうふつとした。田之助たのすけが動き、秀佳しゅうかが語る――

「へい、お暑う、伝吉でございます。」

芝居茶屋の若い衆――といつても、もう頭の禿はげている伝さんが、今戸いまどのおせんべいを持つてくる。

「いい香においだね。」

おしよさんは袋をあけて見ながらいう、そこのおせんべいは、持つてくる時間をいつて、頼んで焼いておいてもらうのだから、ほんとの親切よろこを悦よろこんですぐお茶を入れさせる。

「こんどはひとつどうぞ。」

芝居の話と伝さんの娘の話をして、さんざい袋をもらつてかえる。と、入れちがいに、

「へえ、伝さんが来ましたか？」

と女中さんと話ながら清せいさんが入つて来た。伝さんとおなじの、黒い、麻の着物の尻しりはしよりをおろして、手ぬぐいで、麻裏草履はを穿はいて来た足前つまさきをはたいて、上つて来て、キチンとお辞儀をした。

「お暑うございますな。」

茶献ちやけん上じょうの帯の背にはさんだ白扇をとつて、煽あおぎながら、畳たたみんだ手拭てぬぐいの中をかえして頸くびを拭ふいた。小判形せうばんがたの団扇うちわが二本、今戸名物いまどなぶつ、船佐ふなざの佃煮つくだにの折まがり出でされる。

「川崎屋までまいりましたから、これは私のわぎつとお土産みやげで。」

清さんの兄貴は、川崎屋権十郎の古い男衆おんどだった。

こういう人たちは、中村座が閉場あけば中村座の何屋なにやへ、新富座ならば何処どこと、三、四軒の芝居茶屋を助けもするが、歌舞伎の梅林ばいりんとか三洲屋とか、一、二の茶屋で顔かほのうれている男衆おんどたちだった。

「毎年ぜいしん是真まことさんでござんすから、今年は河竹さんのお頼たのみいたしまして——」

それは団扇うちわの絵えのことだった。河竹さんとは、本所ほんじよに住すむ黙阿弥翁もくあみおうのことで、二人娘ふたりむすめの妹いもうとさんが絵えをかき、姉あねさんはお父ちちさんの脚本きゃくほんのお手伝てづかいをした。

おしよさんの家うちには、そうした団扇うちわに虫むしがつかないように、細こい磨みがきだけ竹たけに通とおして、室むろの隅すみに三角さんかくに、鴨居かもしへ渡わたしてあつた。

「おしよさん、今年ことしのお浴衣そでいは、大層好いいっておはなしですから、夜よ芝居しばいで、お浴衣見物ゆかたみぶつでございますから、ひとつどうぞ、御見物ごみぶつを——」

おしよさんは、今年ことしも船ふねで納涼なつげの催ひらしををと考かんえていたのをやめて、自慢こゝろの、その頃ころでは

めずらしい素鼠地の、藤の揃い浴衣で見物することにきめる。

二絃琴を拵めようとする気持ちと、おしよさんの派手ずきとから、引幕を贈ることもあった。藤の花の下に緋の敷もの、二絃琴を描いてあとは地紙ちらしにして名とりの名を書いたりした。

お坊さんのお婆さんは、——伊藤凌潮という軍談読みの妻君になって、おしよさんや、おしよさんの姉さんで、吉原で清元で売った芸者——古帳面屋のお金ちゃんのお母さんや、末の妹の、その時分には死んでしまつてたが、阪東百代という踊りの師匠のお母さんになつたのだ。おしよさんが若かつた時、太政官の参内の馬車の腰かけの下へかくれていったと、やかましく噂された事もあつたそうだ。お若い××様が御巡幸の時、百代と二人ならんだ姿をお見詰めになつて——たしかにお目にとまつたのだが、まだお齒黒をおつけになつて、お童様だつたから——なんて話もきくともなくきいた。



# 青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 神田附木店

## 長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>